人人は思ひ知り給らめと云しかば日本國を呪咀し申者也とて法華經の第五卷を以て日蓮がつらをうつ事は梵天帝釋も御賢あり。かまくら八幡大菩薩も見させ給ひき。如何にも今は叶ふまじき世也。國の報恩の爲めに國に留り三度は諫むべし。用ひずんば山林に身を隱せと云本文也。本より存知す、何なる山中にても籠て命の程は法華經を讀誦し奉らばやと思ふより外は他事なし。時に五十三。同五月十二日かまくらを立て甲斐の國へ入る。路次のいぶせさ峯に登れば日月をいたゝくが如し。谷に下れば穴に入るが如し。河たけくして船渡らず大石流れて箭をつくが如し。道は狹くして繩の如し。草木しげりて路みえず。かゝる所へ尋入事淺からざる宿習也。かゝる道なれ共釋迦佛は手をひき帝釋は馬となり、梵王は身に立そひ日月は眼に入かはせ給らん故にや。同十七日に甲斐國波木井郷へ著ぬ。波木井殿も對面ありしかば大に悅ひ今生は實長身に及ぶ程は見つき奉るべし。後生をば助け玉へと契りし事はたゝことゝも覺えず。偏へに慈父悲母の波木井殿の身に入かはり日蓮をば哀れみ玉ふ歟。其後身延山へ分入

て山中に居住し法華經を晝も夜も讀誦し奉り候へば三世の諸佛、十方の諸佛菩薩も此砌におはすらん。釋迦佛は靈山に居して八箇年法華經を說き玉ふ。日蓮は身延山に居して九箇年の讀誦也。傳敎大師は比叡山に居して三十餘年の法華經の行者也。雖然、彼の山は濁る山也、我が此の山は天竺靈山にも勝れたり。然れば吹風もゆるく、木草流水の音までも此の山には妙法の五字を唱へずと云ことなし。日蓮が弟子檀那等は此の山を本として參るべし。此れ則ち靈山の契也。山に入て九箇年也。佛滅後二千二百三十餘年也。日蓮ひとり志あり一七日して返る樣に安房國にかへりて舊里を見ばやと思ふて時に六十一と申。弘安五年壬午九月八日身延山を立て武藏國千束の郷池上へ著ぬ。釋迦佛天竺靈山に居して八箇年法華經を說玉ふ。佛入滅は靈山より、艮に當る。東天竺俱尸那國跋提河の西、純陀が家に居して入滅なりしかども八箇年法華經を說せ玉ふ山なればとて御墓をば靈山に建させ玉ひき、されば日蓮も如是身延山より艮に當て武藏國池上右衛門大夫宗長か家にして可死候歟。縱ひいつくにて死候と云とも九箇年

の間心安く法華經を讀誦し奉り候山なれば墓を身延山に立させ玉ひて未來際までも心は身延山に可住候。日蓮は日本六十六箇國島二の內に五尺に足ざる身を一つ置處なく候しかば波木井殿の御育みにて九ヶ年の間身延山にして心安く法華經を讀誦し奉り候つる志をばいつの世にかは思ひ忘るべく候。日蓮は日本第一の法華經の行者也。日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はゞ梵天帝釋四大天王炎魔法王の御前にても日本第一の法華經の行者日蓮房弟子檀那也と名乘て通玉ふべし。此法華經は三途河にては船となり死出の山にては大白牛車、冥途にては燈となり靈山へ參る橋也。靈山へまして艮の廊にて尋させ給へ必ず待奉るべく候。但し各の信心に依へく候。信心だに弱くばいかに日蓮が弟子檀那と名乘せ給ともよも御用ひは候はじ。心に二まし〳〵て信心弱く候はゞ峰の石の谷へころび空の雨の大地へ落ると思食せ。大阿鼻地獄疑あるべからず。其時日蓮はし恨みさせ給な、返々も各信心に依へく候。大通結緣の者は地獄に墮ちて三千塵點却を經候き。久遠下種の輩は地獄に墮

ちて五百塵點却を經たる事、大惡知識にあふて法華經ををろかに信せし故也。返々も能々信心候て異なる故なく靈山へまし〳〵て日蓮を尋させ給へ其時委く可申候南無妙法蓮華經

日蓮

弘安五年壬午七月七日

波木井殿其外人々御中

嗚呼是ぞ日蓮が最後に波木井六郎に與へたる書にして實に其絕筆なり。亦た以て聖日蓮の自著傳と見るべし。

是れより先、日蓮身延山に在りて不豫あり、四條金吾、比企能本等聞いて來る。日蓮乃ち池上宗長の邸に趣かんとて身延を出でゝ、實に弘安五年九月八日なり。波木井實繼等隨ふ者多し。飯澤大井庄司の家に泊し十日曾根次郎の家に宿し、黑駒、河口、異地を經て十四日駿州竹の下に至る。相州關本を經て平塚驛長谷川氏の家に宿す。今の松雲山要法寺是れなり。十七日湖谷、十八日澁九ッ池上に着す。

廿三日大曼荼羅を書して主宗長に與ふ。宗長謹受して云ふ、去る建治元年我

邸内に一寺を建て本門寺と名けたれども未だ開堂供養を爲さざるなり。願くは聖人よ御全快の上は一會の法要を營まれ給はんことを」。日蓮「此度の病氣は定業にて癒ゆべしとは思はれず、幸ひ今日はいと心も爽かなり。いて佛事を營まん」と、枕邊の鐘を撞ちぬ。老幼男女集り來れり。沐浴盥漱、堂に舛り誦經唱題、開堂の法式を嚴修す。かくて高座に登り安國論を講ず。二竪いよ〳〵重し。

一日弟子日朗を召し立像の釋迦、立正安國論、及び御讓狀を與へて其の弘通をなすべきを告ぐ。その讓狀にいはく、

讓與

南無妙法蓮華經

未法相應一閻浮提第一立像釋迦佛一躰立正安國論一卷

右爲妙法流布一切利益於法華中一切功德者所與大國阿闍梨也、至盡未來際爲佛法捨身命一心可弘通妙法者也。夫迹本雖廣不出妙法五字、昔迹今本也、廣略要中取要中要可令弘通一閻浮提撰肝心之要豈捨廣略乎、迹門實相說是久成本也、壽量遠本命迹顯也、今此迹本二門俱迹佛說也、迹無本者不得顯本、無迹依何垂迹、本迹雖殊不思議一、是此經一部正意亦是如來第一實說也、釋尊一代深理、又日蓮一期功德無所殘付屬日朗者也、壽量品云、我本立誓願乃至皆令入佛道每自作是念乃至速成就佛身

弘安五年十月三日

十月八日左の上足の六人を以て六老僧と定め、

大成辨阿闍梨日昭

大國阿闍梨日朗

白蓮阿闍梨日興

佐渡阿闍梨日向

伊豫阿闍梨日頂
蓮華阿闍梨日持

衆に告げて「此六老僧に事ふること、我に事ふるが如くせよ」遺骨は身延に葬りて六老僧輪番に守護せよ」と。又檀徒に多くの調度物品を頒ち、一々日興をして其趣を書せしむ。同十日、註法華經及び肉牙二枚を以て日昭に付屬し「我の說經功德は全く此に蘊す、汝宜しく襲藏すべし」と。十一日、經一廻を召し告げて云ふ「我れ一期の間鎌倉殿に諫言三度、豆に三年、渡に四年、住處を追はるゝ二十餘度。なれど京都の弘通未だなさず。此題目未だ一天の君の耳に入れず。汝よ日朗を師とし、本化の妙法を天聽に達せよ」と。經一廻、涙を以て受く。實に文永五年十月十一日也。この經一廻こそ即ち日像聖人其人なり。

* * * *

地は震ひぬ。弟子檀徒馳せて日蓮の枕邊に聚る。日蓮尊上に安座す。合掌して法華經壽量品を讀誦せらる。衆聲を合せて唱ふ。讀經の聲は澄みわたりぬ。一縷の香煙影冷かにして薫香堂に滿つ。漏刻は八ッを報じぬ。慈顏笑を含み、妙

體眠るが如し。朗峯の山雲愁ひ、多摩の川水悲しむ。噫、絕世の大偉人日蓮大菩提薩埵逝にぬ。獸爲めに泣き、鳥爲めに哭す。實に弘安五年十月十三日也。享年六十有一。

是に於て遺言の如く御骨は荼毘して身延山に葬り畢んぬ。

* * * *

噫、上人滅に入つて爰に七百年。衆生放逸にして五欲に著し、惡道に沈溺して救ふべからざらんとす。嘆かざるを得んや、悲まざるを得ざるなり。予は唯だ爰に上人の玉藻を咏じ以て其の正傳を終らんかな。

たちわたる身のうき雲もはれぬべし
たゞぬ御法の鷲の山風

第八章　日蓮滅後の傳道

第一節　六老僧の傳道

(一)大成辨阿闍梨日昭

建長五年の春、妙法の花一たび清澄の山頭に開いて一念三千の圓清かに、眞如實相の月朗かなり。爰に大成辨阿闍梨日昭は六老僧の第一位としてその宣傳の使命を帶びぬ。

日昭、字は成辨、下總國葛飾郡平賀の人なり、父は畠山祐昭、日昭は其の長男なり。嘉禎二年に生る。建長元年、郡の某寺に至り剃髮して僧となる。名を成辨と改む。後ち比叡山に登りて尊海に親炙す。尊海頗る成辨を器とし之れを教育す。成辨天台の三大部を學し窃かに慈覺の義を怪む。尊海に問ふ、尊海大に喜び益〻其の學に勉めしむ。又た成辨尊海に問ひ、理同事勝の說を唱ふ。尊海大に驚きて云ふ「子は蓮長の徒に非ずや」と。成辨は未だ蓮長を知らざるなり。更に疑て問ふ「蓮長とは誰ぞ」。吾が僧友なり。嘗て鎌倉にて始めて遇ひ、道を共に、

して此の叡山に來り學する數年。今は名を日蓮と改め、東關に徘徊して別に教宗を唱傳す」。成辨乃ち欽慕已まず、遂に叡山を下て日蓮を尋ぬ。

成辨に家姉あり、下總國猿島郡印東氏に嫁す。其の父を印東有國と云ふ。日蓮に歸依す。成辨之れを知り直ちに日蓮を鎌倉に訪ふ。疑團氷解。投じて師弟の契をなす。日蓮、名を日昭と賜ひ大成辨と呼び、常に「辨殿」と呼ぶ。日蓮の門下年少、悉く日昭に囑す。

正嘉二年春、日蓮父の喪に遭ひ房州に趣かんとす。窃かに日昭を召し告げて云ふ「既に世は末法に入りぬ。正に本化出現の秋なり。本化若し出てば三類の强敵出てん。惡口罵詈、固より憂ふるに足らず刀杖遠流あに意に介するに足らんや。吾今汝に囑す、之を體せよ」。また衆に告げて云ふ「今日、法を日昭に付す。設ひ我死すとも汝等心を動かす勿れ。今や不幸父を喪ふ、夫れ孝は百行の本、佛說戒を爲す。我今房州に行かん。衆よ、日昭を見ること我を見るが如くせよ」と。

松葉谷の法難は起れり。文永八年は來りぬ、龍口の難は起れり。日朗捕へられ

て獄に投せらる。日昭乃ち日蓮の命を奉じ名を晦し形を潛め窃かに時の至るを俟つ。衆亦た歸す。

日蓮の滝上に涅槃を現ぜんとするや、十月十日、日昭を召し付するに後事を以てし註法華經十卷、三部要文、本理大綱集を與へて云ふ、「予が終身の受用、是の卷を出てず。末法の規矩集めて大成せり。吾れ世に住すと雖も又之に加ふる無し」と。謹受命を奉ず。

入滅の翌年、即ち弘安六年、小祥の忌辰、爰に日蓮の遺文を集む。その時の事を記して云ふ、

御書目錄日記事

於聖人御入滅之後者、有無道心惡人等、恣作謀書、依稱聖人御書、可惑一切衆生、自去二月比、於信力之貴賤中、成廻文云、聖人御書所持之人者、所奉持撰其數御一周忌持參、可被入目錄之由觸之畢、隨悉持參之御書、大小合之爲一百四十八通、此外縱使雖爲實御書、無左右不可入目錄、若爲此書事爲顯然者、經內談可被入之也、仍六老僧一同、遂談合定之畢。

弘安六年 大歲癸未 十月十二日

日昭
日朗
日興
日向
日頂
日持

乃ち此の目錄に入れるものを錄內と云ひ、此の目錄に入らざるものを錄外と云ふ。

德治元年、越信兩國の大守、風間信昭と云ふ者有り、深く歸依し因て一宇を那瀨に建つ。越後國三島郡那瀨村法王山妙法寺是れなり。又た伊豆に一寺を開く。今の君澤郡玉澤弘延山妙法華寺是れなり。遂に元享三年三月廿六日玉澤に寂す。春秋八十有八。信徒悲哀止まず。遂に爰に葬る。

(二)太國阿闍梨日朗

常に其の側を離れず、伊東の流罪の時隨はんことを欲して腕を折られ、後捕へられて獄中に投せられ、色心全く師と共に法華經を讀みしもの、それ日朗その人か。日朗は下總國猿島郡能天人。父は印東有國なり。寛元三年四月八日を以て生る。幼名吉祥麿と云ふ。建長六年、父有國、吉祥麿を携へて鎌倉に來りて之れを日蓮に投ず。文應元年十六歳雉髪して筑後房と呼び大國と字し日朗と改む。日蓮の伊東に流されんとするや之れに隨はんとして能はず、舟夫の爲めに其の右の腕を折らる。龍の口の難の後ち、捕らへられて獄に投ぜらる。

大學三郎の其の邸地を寺となすや、日朗之れが主となる。鎌倉妙本寺是れなり。池上宗長、また寺を建てゝ長榮山本門寺となすや、日朗行いて之れが監となる。建治三年、曾谷敎信また一寺を建つるやその開祖となる。今の下總國葛飾郡平賀本土寺是れなり。文應元年正月廿一日池上に滅す。春秋七十有八。

(三)白蓮阿闍梨日興

日興は遂に波木井氏と合はず。後世之れを別派となし、勝劣派と稱し、其の源となす。(略傳は之れを分派の起源の章に於てせん)

(四)佐渡阿闍梨日向

父は小林實信、建長五年二月十六日上總國埴生郡藻原に生る。年十三、父に隨ひて鎌倉に至り日蓮に投ず。爾來日蓮に侍し其の宗義に亘るものは之れを記して藏す。日向記即ち是れなり。藻原兼綱一寺を創む。今の上總國長柄郡常在山藻原寺是れなり。日向之が開山たり。正和三年九月三日寂。

(五)伊豫阿闍梨日頂

宗敎家の要とする所、學識尤より無からざるべからずと雖も、學識の其の高きありとも其の品性にして卑かりせば、誠に以て宗敎家として尙ぶに足らざるなり。由來敎家の以て戒行を尙ぶ所以のもの、其の所以なりと云ふべし。聖祖門下に於て此の尙ぶべきの人を尋ぬんか、日頂其の人なるべし。戒行第一となす、即ち此の人なり。

下總國若宮の邑主富木胤繼、妻を喪うて久し。日頂が父は戰に死し、母某、孤兒

三人を養うて鎌倉にあり。乃ち富木氏に嫁す。若宮の隣邑に眞間山弘法寺あり、幼にして寺主了性に從て僧となり、伊豫房と稱す。了性誤て天台の宗義を談じ逃げて弘法寺を去る。弘法寺は天台宗なり。日蓮の文永四年冬房州を發して鎌倉に趣くや行いて若宮を過ぐ。風纖、伊豫房を以て日蓮に投ず。衣を更名を日頂と受く。時に年十六なり。爾來事へて戒行第一たり。弘法寺宗を改めて天台となり、日頂を以て其の開祖となす。文保元年三月八日遂に寂す。齢六十六。

(六)蓮華阿闍梨日持

獨り太平洋上の一孤島に住せず、奮然錫を飛ばして海外布教の大偉業を企てたるもの、予は之を聖祖門下に於て日持を見る。

日持は駿河國庵原郡松野の人なり。初め叡山に登りて台學を修む。慈覺の義を疑ふ。一日岩本に遊んで智海に會ふ。即ち日蓮のあるを知り行いて弟子となる。時に廿一歲なり。松野の邑主某、一梵刹を建て日持を請ふて其開祖となす、今の貞松山蓮永寺是れ也。年四十六、寺を日敎に付し孤身瓢然海外の布敎

に當る。北海道松前に至る。後人其の跡に標して一寺を建つ、今の法華寺是れなり。永仁四年舶に乘じて東方に走る。終に其の後を知らず。

窃かに聞く北京眞定府行唐縣に法華社あり。又た朝鮮開城府に妙蓮寺あり。近年魯西亞人函館に來り本宗葬祭の式を見、寺主に謂つて云ふ、滿洲また此宗有りと。

思ふに日持聖人の事跡を調ぶ。一大事業に屬す、乞ふ大方の諸兄事に是に從ふことあらんことを。

第二節　日像の京都弘通

國の亡びんとするや必ず佞人滿つ。國の興らんとするや必ず爭士有り。佞人は得易く爭士は得難し。鎌倉執權を諫めたるものは日蓮大菩薩其の人にして國興り、天聽に妙法を傳へよく其の道を盡したるものは法孫日像菩薩其人也。日像は下總國葛飾郡平賀の人なり。文永六年八月十日を以て生る。建治元年二月日朗に投ず。日朗大に喜び携へて身延山に上る。日蓮歎んで名を經一麿と改む。時に甫めて七歲なり。弘安五年日蓮の病漸く重きや、經一麿を枕

邊に召し囑するに帝都弘通を以てす。日蓮の鶴林するや金棺の前、落飾して名を日像と改め肥後房と稱す。永仁元年廿五歳、自ら奮て謂ふ、明年は我師十三回の正辰なり、我れ當に帝都に往き大に宗風を振つて我師の素顏に酬ゆべしと十月廿六日、一百日を剋して由井ヶ濱に出て、深く海水に立て自我偈を誦す。毎夜百遍、風濤面を破つて腐を裂く。二年仲春行滿の日、大に首題一遍を海水に向て書す。其の字波に浮んで龍蛇の勢ありしと云ふ。

永仁五年四月廿八日城の東門に立ち朝曦に向て高聲唱題夕に至て止まず。此より日々東に唱へ西に唱へ貴賤を勸誘し緇白を折伏す。五畿七道各石廟に至て首題に大書し以て逆緣に供ふ。故に諸宗の緇徒屢々朝に訴ふ。德治二年五月廿日次相宣房に詔し日像を追ふ。日像答ふるに其理甚だ盡せり。之によりて赦を得たり。延慶三年春復た放たる。城南深草極樂寺良桂、日像に遇ひ、問難往反三晝夜を經、良桂遂に心服して弟子と爲る。徒衆服する者一百餘人なり。又た眞言に實賢なる者あり宗を棄てゝ歸し其寺を改號して眞經寺と云ふ。應長元年三月日像赦に遇て洛に入り、石上に坐して毒鼓再び振ふ。頑雲、

月を嫉み讒諛明を隔つ。元亨元年冬十月三たび京都を追はる。元亨元年十一月八日後醍醐天皇遂に詔して赦を贈り地を附す。今の妙顯寺是れなり。天皇復た尾州松葉莊備中穗太莊を捨てゝ寺供に充つ。建武元年四月詔して勅願寺に班せらる。本宗の京都に流布する、是に始まる。曆應四年秋、遺誡六條を製し後事其弟子妙實に囑して退藏す。康永元年十一月十三日終に齋七十四を以て盡焉として化を他界に遷す。廟を極樂寺に立て後ち寶塔寺と改む。

法嗣妙實は攝政近衛經忠の子なり。初め密乘を修めしが月像の講を聞き翻然棄てゝ其の化に從ふ。時に十七歳他。文和元年夏大旱、諸宗の僧徒雨を祈つて驗無し、妙實詔を奉じて祈る。雨沛然として來る。後光明天皇感激已まず遂に日蓮に大菩薩を追贈し、日朗月像に菩薩を贈り、妙實に大覺の號を贈り、大僧正に任じ呼んで大覺大僧正と云ふ。延文三年七月詔して曰ふ。

宜爲四海唱導一致一乘之弘通。

と。是より妙香九重の雲に薰ず。

餘錄

第一章　日蓮宗の發展

第一節　十界の漫荼羅

爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん、龍樹天親等天竺妙樂等だにも顯し給はざる大曼荼羅を末法に入て二百餘年の頃はじめて法華弘通のはたじるしとして顯し奉る也。是れ全く日蓮が自作にあらず多寶塔中大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊也。されば首題の五字は中央にかゝり、四大天王は寶塔の四方に坐し釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ、普賢文殊等舍利弗目蓮等坐を屈し、日天月天第六天の魔王龍王阿修羅其外不動愛染は南北の二方に陣を取り惡逆の達多、怨癡の龍女一座をはり、三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神十羅刹女等、加之日本國の守護神たる天照大神八幡大菩薩天神七代地神五代の神々、總じて大小の神祇等體の神つらなる。其餘の用の體豈にもるべきや。寶塔品に云く接諸大衆

皆在虚空云云。此等の佛菩薩大聖等、總じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず此御本尊の中に住し給ふ。妙法五字の光明に照されて本有の尊形となる。是を本尊とは申なり。

遠いかな悠々時を去る三千年、釋迦當時の事、知るべからざる也。只だ我れ之れを信ず、佛滅後六百の季暦、七百の初運、爰に龍樹論師出て、中觀論、十二不門論、大智度論、法華論等を造りたりと。龍樹は實に釋迦滅後相承の始祖なりと謂ふべし。

龍樹の中觀論に曰く「因緣によりて生ずる所の法を我説く即ち是れ空、亦た假名と名け亦た是れ中道義、宇宙間の現象、一として因緣によりて生せざる無し。一個の神あつて之を爲すにあらず。多くの神あつて之れを造るにあらざるなり。既に因緣によりて生ず、其の現象や假なり、假なるが故に有にあらず。空なり、空なるが故に無にあらず。無を絶し、有を絶したる中道なり。これぞ印度大乘哲學に於ける宇宙實體論の淵源なる。

佛滅後一千年、迦腦と云ふものあり、支那に來る。實に漢の明帝の時なり。後東

魏に一傑士出でぬ之れを慧文禪師となす。龍樹の中觀論を讀んで悟る所あり始めて一心三觀の說を唱ふ。慧文は慧思に授く。慧思は即ち南獄禪師なり。南獄は之れを智顗に授く。智顗住して天臺山にあり。天臺山は今の浙江省臺州府天臺縣の北にありしなり。天臺智者即ち此の人なり。妙法蓮華經の五字を釋して玄義二十卷を著し、法華經の句義を釋して文句二十卷を造り、摩訶止觀二十卷を著す。稱して天臺の三大部となす者即ち是れなり。慧文の三觀は龍樹の假空中の三諦より出て、一展して天臺に至て一念三千となる。天臺より六傳して湛然に至る。即ち荆溪妙樂寺の圓通大師即ち是れなり。金剛錍論を造る妙樂に至て事の一念三千の曙光現る。止觀、玄義、文句を釋し止觀輔行、玄義釋籤、文句疏記を著す。妙樂即ち湛然は是れを道遽に授く。日本の傳敎最澄は此の道遽に受けしなり。龍樹に出て、南獄を經、智者に至りし一心三觀は妙樂を傳へて最澄の日本に來りしもの是れ實に大慢茶羅を畫かしめしなり。龍樹の發せる中道論、是れぞ觀心本尊抄を現さしめし伏線なる。

大慢茶羅爰に大壇場と齟ず。即ち信仰の對象(The object of belief)なり。之れに

十界を具す、惡逆の達多は地獄界なり、鬼子母神、十羅刹女は餓鬼界なり、龍女は畜生界なり、阿修羅王は修羅界なり、天照八幡は人間界なり、日月四天王は天上界なり、普賢文殊舍利弗目蓮は聲聞緣覺の二界なり、淨行無邊行の菩薩は菩薩界なり、釋迦多寶の二尊は佛界なり、而して多寶は迹化の佛なり、別して以上の十界となし總じて之を妙法蓮華經となす。十界悉く各十界を具す、此の十界各十如是を具す。十如是各々三世間を具す。即ち衆生世間、國土世間、五陰世間是れなり。之れを總算して三千となす。此三千は已心の一念に存す。之れを一念三千と云ふ。即ち聖日蓮云く

我身三身即一の佛にてありける事を經に說て云如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等と云へり。始めの如是相とは我形を云ふなり、是を應身如來と云ふ。又解脫とも云、又假諦とも云。如是性とは我心と云也、是を報身如來と云、又般若の德とも云、又空諦と云。如是體とは我此身を云也。是を法身如來と云、又法性とも中道とも本覺とも實相とも涅槃とも不變とも眞如とも申たる也。されば此三如是を

三身如來とは云也。此三如是が三身如來にておはしましけれをよそと思ひたてつるは、はや我身の上にてありける也。かく知ぬるを法華經をさとれる人とは申也。此三如是を本として是より、のこりの七如是は出てゝ十如是とは成たる也。此十如是が百界にも千如にも三千世間にも成たるなり。此十如是か百界にも千如にも三千世間にも成たる也。かくの如く多くの法門と成て八萬法藏と云はるれとも、すべて只一の三諦の法にて三諦より外には法門無事也。

今、既に己心の一念三千を觀ず。己心の原體を探ねざるべからず。吾人は吾人を存在せりと認識す。吾人の存在を認識する本原は何ぞ。精神の本體は何ぞ。心の本體は何ぞ。心は色に對する相對的の言辭也。心が色か、色が心か、之を知らんと欲す、玄の又玄なり。即ち理觀の一念三千は事觀の一念三千ならざるべからず。是れ即ち日蓮宗の起りし所以にして稱して事の一念三千と云ふ。十界の一界地獄界は瞋恚なり、餓鬼界は貪欲なり、畜生界は愚癡なり、地獄餓鬼畜生の三惡道、即ち貪瞋癡の三毒なり。いま瞋と云ふ感情を抽象して之を

視よ。瞋は心法なり、法は因緣によりて生ず。その因緣は神經を不快に刺戟したるにあり。刺戟せし力と此の刺戟を感ぜし神經と存す。刺戟せし力を因とせば、刺戟を感ぜし當對は緣なり。此の因此緣合して爰に瞋法を生ず。瞋法の中に十界あり、即ち相交截して來る。心理學に所謂觀念の聯合なり。此の數觀念は其要素に十如是を有す。如是の相を有し、如是の性を有す、如是の體あり。或る力あり、或る作用をなす、或る因あり、ある緣あり而してある果をなす、而してある影響あり。されど皆な觀じ來れば一念の中に存す。此の要素中の一如是例へば緣は三種の世間を含むなり。即ち國土世間、衆生世間、五陰世間なり。國土は其の住する處、衆生世間は有情界なり、五陰は色、受、行、想、識なり。さらば瞋と云ふ感情は是等微細の要素よりなる。此の要素をなし之れをなさしむる本源は何ぞ。單細胞の運動が、神經組織か。あらず物質は宇宙の本躰にあらず。力か、力は物質の以前に存せしか。知るべからず、識るべからず。云ひ放ち畢らんかな、因緣所生法、我說即是空、亦名爲假名、亦是中道義と。此の如しと雖も、瞋法は常に此の十界に住す。之れを稱して十界常住と云ふ。十界常住、之れ

を法と云ふ。此の如きの法や空假中の三諦に住す。三諦圓融す。之れを妙と云ふ。三世間具足は蓮なり。十如因果は華なり。之れを稱して妙法蓮華經と云ふ。即ち知る宇宙の現象は妙法蓮華經にして其の實在は妙法蓮華經なることを。又た見る己心の本躰は妙法蓮華經にして己身の所變また妙法蓮華經なることを。故に日蓮曰く

我等衆生は妙法蓮華經の當體なり

我身既に妙法蓮華經の當體なり。而して宇宙また妙法蓮華經の當體なり。我身と宇宙、宇宙と我身、一にして二、二にして一なり。是の故に聖日蓮曰く

正直に方便を捨てゝ但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は煩惱業苦の三道、法身般若解脱の三德と轉じ三觀三諦即一心に顯れ其人所住の處常寂光土なり

と。南無とは歸命の意なり。南無妙法蓮華經とは妙法蓮華經に歸命するの意なり。我身に歸命し宇宙に歸命す。故に南無妙法蓮華經と唱ふる時は我身全く宇宙と合し、其所に宇宙無くまた我身非るなり。題目の功德、是れに於てか

無量無邊なり。此れが對象は即ち十界の曼荼羅なり。即ち知る十界の曼荼羅は己心の圓鏡にして宇宙の縮圖なることを。之を卷けば己れの心の中に藏し、之れを開けば宇宙を包含す。宗教を以て調和となす。(Religeon)は即ち調和の義なり。神人の調和未だ小なり。人と宇宙との調和と云へ。本宗の修養是に於てか高かく、本宗の題目是に於てか崇し。

第二節　觀心本尊鈔

物質は常に運動す。運動は地位の變化なり。諸法は常に變化す。變化は宇宙の妙味なり。紅顏朝に在て白頭夕に存す。梅花初春に咲いて明月中秋に出づ。宇宙常あらざるに似たり。されど此の間に於いて永劫變らざるものあり。是れ眞如なり。如來藏なり。即ち宇宙の實體は常住なり。此の如く觀ずるものを是れ理觀の常住となし、迹門の十四品に說く所となす。

然れども思へ、宇宙の現象、それ自身にして變らざることを。紅顏必ず青春に於てし、白頭多く晩老に於てす。春に明月を見るなく秋に梅花を見る無し。之れを化學者に問へ物質は不生不滅なりと云ふにあらずや。之れを物理學者

に開け、エネルギーは恒存すと云ふにあらずや。あに宇宙現象に於てまた常住ならずとせんや。此の如く觀ずるもの是れ事觀の常住にして本門十四品に說く所なり。傳敎大師最澄が眞俗二諦の不生不滅と云ひしもの實に此事理二觀の常住の謂ひなり。

故に聖日蓮曰く

今本時ノ娑婆世界ニ三災ヲ離レ四劫ヲ出デタル常住ノ淨土ナリ。佛既ニ過去ニモ滅セズ未來ニモ生セス所化以デ當體ナリ。是レ已心ノ三千三種ノ世間ナリ。迹門十四品ニハ未ダ之ヲ說カズ

と。是れ觀心本尊抄の筆せられたる所なり。

如來滅後五五百歲始觀心本尊鈔

本朝沙門　日蓮撰

摩訶止觀第五云（世間與二如是一也明合與也）一夫一心具二十法界一一法界又具二十法界百法界一界具二三千種世間一百法界即具二三千種世間一此三千在二一念心一若无心而已介爾有心即具二三千一乃至所以稱爲二不可思議境一意在於此一等云云（或本云一界具二三種世間一）

問曰玄義明二一念三千名目一乎答曰妙樂云不明、問曰文句明二一念三千名目一乎答曰妙樂云不明、問曰其妙樂釋如何答曰並未云一念三千一等云云、問曰止觀一二三四等明二一念三千名目一乎答曰无之、問曰其證如何答曰妙樂云故至二止觀正明一觀法一並以三千一而爲指南一等云云、疑云玄義第二云又一法界具二九法界一百法界千如是等云云、文句第一云一入具二十法界一一界又十界十界各十如是即是一千等云云、觀音玄云十法界交互即有二百法界一千種性相冥伏在二心一雖不二現前一宛然具足等云云、問云止觀前四明一念三千名目一乎答曰妙樂云不明、問曰其釋如何答弘決第五云若望二正觀一全未論行、亦歷廿五法一約事生解方能堪一爲二正修方便一是故前六皆屬於解等云云、又云故至止觀正明一觀法一並以三千一而爲指南一乃是終窮究竟極說、故序中云說己心中所行法門一良有以也請尋讀者心无異緣一等云云、夫智者弘法三十年廿九年之間說玄文等諸義一明五時八敎百界千如一前五百餘年之間實諸非並天竺論師顯未述、章安大師云天竺大論尙非其類一震旦人師何勞及語此非誇耀法相然耳云云、无墓哉天台末學等花嚴眞言元祖盜人被盜取一念三千重寶

還成彼等門家、 章安大師兼知此事難言斯言若壓將來可悲云云、 問曰百界千如與一念三千差別如何、 答曰百界千如限有情界一念三千互情非情、不審云非情互十如是草木有心如有情可爲成佛如何、 答曰此事難信難解也、 天臺難信難解有二一敎門難信難解二觀門難信難解、 其敎門難信難解者於一佛所說爾前諸經二乘闡提未來永不成佛敎主釋尊始成正覺來至法花經迹本二門與彼二說、 一佛二言水火也誰人信之此敎門難信難解也、 觀門難信難解百界千如一念三千非情之上色心二法十如是是也、 雖爾於木畫二像者外典內典共許之爲本尊、 於其義出自天臺一家、 草木之上不置色心因果木畫像奉恃本尊无益也、 疑云草木國土之上十如是因果二法出何文乎、 答曰止觀第五云國土世間亦具十種法所以惡國土相性躰力等云云、 釋籤第六云相唯在色性唯在心躰力作緣義兼色心因果唯心報唯在色等云云、 金錍論云乃是一草一木一礫一塵各一佛性各一因果具足緣了等云云、 問曰出處既聞之觀心之心如何、 答曰觀心者觀我已心見十法界是云觀心也、 譬如雖見他人六根未見自面六根不知自具六根向明鏡之時

始見自具六根、 設諸經之中處處雖載六道並四聖不見法花經並天臺大師所述摩訶止觀等明鏡不知自具十界百界千如一念三千也、 問曰法花經何文天臺釋如何、 答曰法花經第一方便品云欲令衆生開佛知見等云云是九界所具佛界也、 壽量品云如是我成佛已來甚大久遠壽命无量阿僧祇劫常住不滅諸善男子我本行菩薩道所成壽命今猶未盡復倍上數等云云此經文佛界所具九界也、 經云提婆達多乃至天王如來等云云地獄界所具佛界也、 經云一名藍婆乃至汝等但能護持法花名者福不可量等云云此餓鬼界所具十界也、 經云龍女乃至成等正覺等云云此畜生界所具十界也、 經云波稚阿修羅王乃至聞一偈一句得阿耨多羅三藐三菩提等云云修羅界所具十界也、 經云若人爲佛故乃至皆已成佛道等云云此人界所具十界也、 經云大梵天王乃至我等亦如是必當得作佛等云云此天界所具十界也、 經云舍利弗乃至花光如來等云云此聲聞界所具十界也、 經云其求緣覺者比丘比尼乃至合掌以敬心欲問具足道等云云此緣覺界所具十界也、 經云地涌千界乃至眞淨大法等云云此菩薩界所具十界也、 經云或說己身或說他身等云

云即佛界所具十界也　問曰自他面六根共見之於彼此十界者未見之如何信之、答曰法花經法師品云難信難解寶塔品云六難九易等云云、天台大師云二門悉與昔反難信難解、章安大師云佛將此爲大事何可得易解耶等云云、傳敎大師云此法華經最爲難信難解隨自意故等云云、夫在世正機過去宿習厚之上、敎主釋尊多寶佛十方分身諸佛地涌千界文殊彌勒等扶之令諫曉猶不信者有之、五千去席人天被移、況正像何況末法初哉汝信之者非正法、問曰經文並天台章安等解釋无疑網、但以火云水以墨云白設雖爲佛說難取信、今數見他面但限人界不見余界自面亦復如是如何立信心乎、答數見他面或時喜或時嗔或時平或時貪現或時痴現或時諂曲、嗔地獄貪餓鬼痴畜生諂曲修羅喜天平人也、於他面色法六道共有之四聖冥伏不現委細尋之可有之、問曰於六道雖不分明粗聞之似備之四聖全不見如何、答曰前人界六道疑之雖然强言之出相似言、四聖又可爾欺試添加道理萬一宣之、所以世間无常有眼前豈人界无二乘界乎、无願惡人猶慈愛妻子菩薩界一分也、但佛界計難現以具九界强信之勿令疑惑、法花

經文說人界云欲令衆生開佛知見、涅槃經云學大乘者雖有肉眼名爲佛眼、等云云、末代凡夫出生信法花經人界具足佛界故也、問曰十界互具佛語分明、雖然我等劣心具佛法界難取信者也、今時不信之必成一闡提顚起大慈悲令信之救護阿鼻苦、答曰汝既見聞唯一大事因緣經文不信之自釋尊已下四依菩薩並末代理即我等如何汝救護不信乎、雖然試言之值佛不覺者阿難等邊得道者有之、其機有二一見佛法花得道二不見佛法花得道也、其上佛前漢土道士月支外道以儒敎四章陀等爲緣入正見者有之、又利根菩薩凡夫等聞花嚴方等般若等諸大乘經以緣顯示大通久遠下種者多多也、例如獨覺飛花落葉敎外得道是也、无過去下種結緣者執着權小者設奉値法花經不出小權見、以自見爲正義故還以法花經或同小乘經或同花嚴大日經等或下之、此等諸師劣自儒家外道賢聖者也、是等且置之、十界互具立之石中火木中花難信値緣出生信之、人界所具佛界水中火火中水最甚難信、雖然龍火出自水龍水生自火不得心有現證用之、既人界入界信之佛界何不用之、如堯舜等聖人者於万民无偏頗人界佛界一分也、

不輕菩薩於所見人見佛身、悉達太子自人界成佛身、以此等現證可信之也、問曰教主釋尊自之堅固秘之三惑已斷佛也、又十方世界國主一切菩薩二乘人天等主君也、行時梵天在左釋帝侍右四衆八部聳後金剛導前、演說八万寶藏令得脫一切衆生、如是佛陀以何我等凡夫之令住已心乎、又以迹門爾前之意論之教主釋尊始成正覺佛也、尋求過去因行者或能施太子或儒童菩薩或尸毘王或薩埵王子、或三祇百劫或動喩塵劫或无量阿僧祇劫或初發心時或三千塵點等之間、供養七万五千六千七千等之佛積劫行滿今成教主釋尊、如是因位諸行皆我等已心所具菩薩界功德歟、以果位論之教主釋尊始成正覺佛、四十余年之間示現四教色身演說爾前迹門涅槃經等利益一切衆生、所謂花嚴五時十方臺上盧舍那、阿含經三十四心斷結成道佛、方等般若千佛等、大日金剛頂等千二百余尊、並迹門寶塔品四土色身、涅槃經或見丈六或現小身大身或見盧舍那或見身同盧空、四種身乃至八十御入滅留舍利利益正像末、以本門擬之、教主釋尊五百塵點已前佛也、因位又如是自其已來、分身十方世界、演說一代聖教、教

化塵數衆生、以本門所化、一諦與大海、一塵與一大山也、本門一菩薩對向迹門十方世界文殊觀音等、以猿猴比帝釋尚不及、其外十方世界、斷惑證果二乘拜梵天帝釋、日月四天、四輪王、乃至無間大城大火炎等、此等皆我一念十界歟、已心三千歟、雖爲佛說不可信之、以此思之、爾前諸經實事也實語也、華嚴經云、究竟離虛妄、無染如虛空、仁王經云、窮源盡性、妙智存、金剛般若經云、有清淨善、馬鳴菩薩起信論云、如來藏中有清淨功德、天親菩薩唯識論云、謂餘有漏劣無漏種、金剛喩定現在前時、引極圓明、純淨本識、非彼依故、皆永弃捨、等云云、爾前經々與法華經校量之、彼經々無數也、時節既長、一佛二言、可付何、彼馬鳴菩薩、付法藏第十一、佛記有之、天親千部論師、四依大士也、天台大師邊鄙小僧、不宣一論、唯信之、其上捨多付少、法華經文分明、少有恃怙、法華經文何所、十界互具、百界千如、一念三千分明證文有之、隨開柘經文、斷諸法中惡等云云、天親菩薩法華論、堅慧菩薩法性論、十界互具、無之、漢土南北諸大人師、日本七

寺末師之中無此義、但天台一人僻見也、傳教一人謬傳也、故清涼國師云天台之謬、慧苑法師云然以天台呼小乘爲三藏教其名謬濫等云云、了洪云天台獨未盡華嚴之意等云云、得一云咄哉智公、汝是誰弟子、以不足三寸舌根、而謗覆面舌之所說教時等云云、弘法大師云震旦人師等諍盜醍醐各名自宗等云云、夫一念三千法門一代權實削名目、四依諸論師、不載其義、漢土日域人師不用之、如何信之、答曰、此難最甚最甚、但諸經與法華相違、自經文事起文明、未顯與己顯、證明與舌相、二乘成不成、始成與久成等顯之、諸論師事章、天台大師云天親龍樹內鑑冷然、外適時宜、各權所據、而人師偏解、學者苟執、遂與矢石、各保一邊、大乘聖道也、等云云、章安大師云天竺大論尚非其類、眞且人師、何勞及語、此非誇耀、法相然耳等云云、天親龍樹馬鳴堅慧等內鑒冷然、雖然時未至、故不宣之歟、於人師者、天台己前或含珠、或一向不知之、己後人師或初破之、後有歸依人、或一向不用者有之、但可會斷諸法中惡經文也、彼法華經載爾前經文也、往見之、經文分明十界互具說之、所

謂欲令衆生開佛知見等云云、天台承此經文云若衆生無佛知見何所論開、當知佛之知見、蘊在衆生也云云、章安大師云衆生若無佛之知見、何所開悟、若貧女無寶藏、何所示也、等云云、但所難會上敎主釋尊等大難也、此事佛遮會云、已今當說、最爲難信難解、次下六難九易是也、天台大師云二門悉與昔反、難信難解、當鉾難事、章安大師云佛將此爲大事、何得易解耶、傳敎大師云此法華經最爲難信難解、隨自意故等云云、夫自佛至于滅後一千八百餘年、經歷三國但有三人、始覺知此正法、所謂月氏釋尊、眞丹智者大師、日域傳敎、此三人內典聖人也、問曰、龍樹天親等如何、答曰、此等聖人知而不言之仁也、或迹門一分宣之、不云本門與觀心、或有機無時歟、或機時共無之歟、天台傳敎已後知之者多多也、用二聖智故也、所謂三論嘉祥、南三北七百餘人、華嚴宗法二藏清涼等法相宗玄奘二藏、慈恩大師等、眞言宗善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏等、律宗道宣等、初存反逆、後一向歸伏也、但遮初大難者、無量義經云、譬如國王夫人新生王子、若一日若二日、若至七日、

若一月若二月、若至七月、若一歲若二歲、若至七歲、雖復不能領理國事、已爲臣民之所宗敬、諸大王子以爲伴侶王、及夫人愛心偏重常與共語、所以者何、以稚小故、善男子是持經者亦如是、諸佛國王是經夫人和合、共生是菩薩子、若菩薩得聞是經、若一句若一偈、若一轉若二轉、若十若百、若千若萬若億萬、恒河沙無量無數轉、雖復不能體眞理極乃至已爲一切四衆八部之所宗仰、諸大菩薩以爲眷屬、乃至常爲諸佛之所護念、慈愛偏覆以新學故、等云云、普賢經云此大乘經典諸佛寶藏十方三世諸佛眼目、出生三世諸如來種、乃至汝行大乘不斷佛種等云云、又云此方等經是諸佛眼、諸佛因是得具五眼、佛三種身從方等生、是大法印、印涅槃海、如此海中能生三種佛淸淨身、此三種身人天福田等云云、夫以釋迦如來一代顯密、大小二教、華嚴眞言等諸宗依經往勘之、或十方臺葉毗盧遮那佛、大集雲集諸佛如來、般若染淨千佛示現、大日金剛頂等千二百尊、但演說其近因近果、不顯其遠因遠果、速疾頓成說之、亡失三五遠化、化導始終削跡不見、華嚴經大日經等一往見之、似別圓

四藏等、再往勘之、同藏通二教、未及別圓、本有三因無之、以何定佛種子、而新譯譯者等、來入漢土之日、見聞天台一念三千法門、或添加自所持經々、或自天竺受持之由稱之、天台學者等或同自宗悅、或貴遠賤近或捨舊取新、魔心惡心出來、雖然所詮非一念三千佛種者有情成佛不畫二像之本尊有名無實也、問曰上大難未聞其會通如何、答曰、無量義經云雖未得修行六波羅、六波羅密自然在前等云云、法華經云欲聞具足道等云云、涅槃經云、薩者名具足等云云、龍樹菩薩云薩者六也等云云、無依無得大乘四論玄義記云、妙者譯云六、胡法以六爲具足義也、吉藏疏云妙者飜爲具足、天台大師云薩者梵語、此翻妙等云云、私加會通如顯本文、雖爾文心者釋尊因行果德二法、妙法蓮華經五字具足、我等受持此五字、自然讓與彼因果功德、四大聲聞領解云、無上寶聚不求自得云云、我等已心聲聞界也、如我等無異、如我昔所願、今者已滿足、化一切衆生、皆令入佛道云云、妙覺釋尊我等血肉也、因果功德非骨髓乎、寶塔品曰其有能護此經法者、則爲供養我及多寶、乃至亦復供養諸來

化佛」莊嚴光飾諸世界」者等云云、釋迦多寶十方諸佛、我佛界也、紹繼其跡」受」得其功德」須臾聞」之即得究竟阿耨多羅三藐三菩提是也、壽量品云然我實成佛已來、無邊無邊、百千萬億那由他劫等云云、我等已心釋尊五百塵點乃至所顯三身、無始古佛也、經云我本行菩薩道」所成壽命、今猶未」盡、復倍」上數」等云云、我等已心菩薩界也、地涌千界菩薩、己心釋尊眷屬也、例如」太公周公旦等」者、周武臣下成王幼稚眷屬、武內大臣、神皇功后棟梁、仁德王子臣下也、上行無邊行、淨行安立行等、我等己心菩薩也、妙樂大師云富」知身土一念三千、故成道時稱」此本理」一身一念遍」於法界」等云云、夫始自」寂滅道場華藏世界」終」于沙羅林」五十餘年之間、華藏密嚴三變四見等之三土四土皆成劫之上無常土、所」變化」方便實報、寂光安養淨琉璃密嚴等也、能變教主入」涅槃」所變諸佛隨滅盡、土又以如」是、今本時娑婆世界離」三災」出」四劫」常住淨土、佛既過去不」滅、未來不」生、所化以同體、此即已心三千具足三種世間也、迹門十四品未說」之、於」法華經內」時機未」熟故歟、此本門肝心於」南無妙法蓮華經五字」佛

猶文珠藥王等不」囑」之、何況其已下乎、但召」池涌千界」說」八品」付」囑之」其本尊爲」體、本時娑婆上寶塔居」空、塔中妙法蓮華經左右釋迦牟尼佛多寶佛、釋尊脇士上行等四菩薩、文珠彌勒等四菩薩眷屬居」末座」迹化多方大小諸菩薩萬民處」大地」如」見」雲閣月卿」十方諸佛處」大地上」表」迹佛迹土」故也、如」是本尊在世五十餘年無」之、八年之間但限」八品」正像二千年之間小乘釋尊、迦葉阿難爲」脇士」權大乘幷涅槃法華經迹門等釋尊、以」文殊普賢等」爲」脇士」此等佛造」畫正像」未」有」壽量佛」來」入末法」始此佛像可」令」出現」歟、問正像二千餘年之間、四菩薩三國玉臣俱未」崇」重之由申」之、此事粗雖」聞」之、前代未聞故、驚」動耳目」迷」惑心意」請重說」之、委細聞」之、答曰、法華經一部八卷二十八品、進前味退涅槃經等一代諸經、總括」之但一經也、始自」寂滅道場」終至」于般若經序分也、無量義經法華經普賢經十卷正宗也、涅槃經等流通分、正宗於」十卷中」亦有」序正流通」無量義經幷序品序分也、自」方便品」至」于分別功德品十九行偈」十五品半正宗分、分別功德品自」現在四信」至」于普賢經」十一品半一卷流通分也、又

於法華經十卷有二經　各具序正流通也、無量義經序品序分自方便品至于人記品八品正宗分、自法師品至于安樂行品五品流通分、論其教主始成正覺佛、說本無今有百界千如　超過已今當　隨自意難信難解正法也、尋過去結緣　大通十六王子之時下佛果種進者以華嚴經等前四味爲助緣令覺知大通種子　此非佛本意　但毒發等一分也、二乘凡夫等前四味於緣漸々來至法華　顯種子遂開顯機是也、又於在世始聞八品　人天等或聞一句一偈等爲下種　或熟或脫、或至普賢涅槃等　或正像末等以小權等爲緣入法華　例如在世前四味者　又本門十四品一經有序正流通　涌出品半品爲序品　壽量品前後二半、此爲正宗　其餘流通分也、論其教主非始成正覺釋尊　所說法門亦如天地　十界久遠之上國土世間既顯、一念三千殆隔竹膜　亦迹門并前四味、無量義經涅槃經等三說、悉隨他意易信易解也、本門三說外難信難解隨自意也、又於本門有序正流通自過去大通佛法華經　乃至現在華嚴經、乃至迹門十四品、涅槃經等一代五十餘年諸經、微塵經々皆壽量品序分也、自一品二半之外、名小乘教

邪見教、未得道教、褒相教、論其機德薄垢重、幼稚貧窮孤露同禽獸也、爾前迹門圓教尙非佛因、何況大日經等諸小乘經、何況華嚴眞言等、七宗等論師人師宗、與論之不出前三教、奪云之同藏通、設法稱甚深、未論種熟脫、還同灰斷、化無始終是也、譬如雖爲王女懷姙畜種、其子尙劣旃陀羅、此等且閣之、迹門十四品正宗八品一往見之以二乘爲正、以菩薩凡夫爲傍、再往勘之、以凡夫正像末爲正、正像末三時之中以正法始爲正中正、問曰、其證如何、答曰法師品云而此經者如來現在猶多怨嫉、況滅度後、寶塔品云令法久住乃至所來化佛、當知此意等、勸持安樂等可見之、迹門如是以本門論之一向以末法之初爲正機、所謂一往見之時以久遠爲下種、大通前四味迹門爲熟　至本門令登等妙、再往見之不似迹門、本門序正流通俱以末法之始爲詮、在世本門、末法之初一同純圓也、但彼脫此種也、此一品二半此但題目五字也、問曰、其證文如何、答曰涌出品云爾時他方國土諸來菩薩摩訶薩、過八恒河沙數於大衆中起立合掌、作禮而白佛言、世尊若聽我等於佛滅後在此娑婆世界、勤

加精進、護持讀誦書寫供養是經典、當於此土而廣說之、爾時佛告諸菩薩摩訶薩衆、止、善男子不須汝等護持此經等云云、自法師品以下五品經文、前後水火也、寶塔品末云以大音聲普告四衆、誰能於此娑婆國土廣說妙法華經等云云、設雖爲教主一佛將勸之、藥王等大菩薩、梵帝日月四天等可重之處、多寶佛十方諸佛爲客佛諫曉之、諸菩薩等聞此慇懃付屬、立我不愛身命誓言、此等偏爲叶佛意也、而須臾之間佛語相違制止過八恒沙此土弘經、進退惟谷不及凡智、天台智者大師作前三後三六釋會之、所詮迹化他方大菩薩等以我內證壽量品不可授與、末法初誘法國惡機故止之、召地涌千界大菩薩壽量品肝心以妙法蓮華經五字令授與閻浮衆生也、又迹化大衆非釋尊初發心弟子等故也、天台大師云是我弟子應弘我法、妙樂云、子弘父法有世界益、補正記云以法是久成法、故付久成三人等云云、又彌勒菩薩疑請云經云我等雖復信佛隨宜所說佛所出言未曾虛妄、佛所知者皆悉通達、然諸新發意菩薩、於佛滅後若聞是經、或不信受而起破法罪業因緣、唯然世尊願爲解說除我等疑、及未來

世諸善男子聞此事已亦不生疑等云云、文意者壽量法門爲滅後請之也、壽量品云或失本心或不失者乃至不失心者、見此良藥色香俱好、即便服之、病盡除愈等云云、久遠下種大通結緣、乃至前四味迹門等一切菩薩二乘人天等於本門得道是也、經云餘失心者見其父來雖亦歡喜問訊求索治病、然與其藥而不肯服、所以者何、毒氣深入失本心故、於此好色香藥而謂不美、乃至我今當設方便令服此藥、乃至是好良藥今留在此、汝可取服勿憂不差、作是教已、復至他國遣使還告等云云、分別功德品云惡世末法時等云云、問曰此經文遣使還告如何、答曰四依也、四依有四類小乘四依多分正法前五百年出現、大乘四依、多分正法後五百年出現、三迹門四依、多分像法一千年、少分末法初也、四本門四依、地涌千界末法始必可出現、今遣使還告地涌也、是好良藥、壽量品肝要、名體宗用教南無妙法蓮華經是也、此良藥佛猶不授與迹化、何況他方乎、神力品云爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩、從地涌出者皆於佛前、一心合掌瞻仰尊顏、而白佛言、世尊我等於佛滅後世尊分身所在國土滅度之處當廣說此

經等云云、天台云但見下方發誓等云云、道遥云付屬者此經唯付下方涌出菩薩、何故爾、由法是久成之法、故付久成之人等云云、夫文殊師利菩薩東方金色世界不動佛弟子、觀音、西方無量壽佛弟子、藥王菩薩、日月淨明德佛弟子、普賢菩薩寶威德佛弟子、一往爲扶釋尊行化、來入娑婆世界、又爾前迹門菩薩也、非本法所持人、不足末法弘法者歟、經云爾時世尊乃至一切衆前現大神力、出廣長舌、上至梵世、乃至十方世界衆寶樹下師子座上諸佛、亦復如是、出廣長舌等云云、夫顯密二道一切大小乘經中釋迦諸佛幷座、舌相至梵天文無之、阿彌陀經廣長舌相覆三千、有名無實、般若經舌相三千放光說般若全非證明、此皆兼帶故、覆相久遠故也、如是現十神力、地涌菩薩囑累妙法五字、於無量無邊百千萬億阿僧祇劫爲囑累故、說此經功德猶不能盡、以要言之、如來一切所有之法、乃至宣示顯說、明知果分一切所有之法、果分一切自在神力、果分一切秘要之藏、果分一切甚深之事、宣示顯說也等云云、此十神力以妙法蓮華經五字授與上行安立行淨行無邊行等四大菩薩、前五神力爲在世、

後五神力爲滅後、雖爾再往論之、一向爲滅後也、故次下文云以佛滅度後、能持此經故、諸佛皆歡喜、現無量神力等云云、次下囑累品云爾時釋迦牟尼佛、從法座起、現大神力、以右手摩無量菩薩摩訶薩頂、乃至今以付囑汝等、等云云以地涌菩薩爲頭、迹化他方、乃至梵釋四天等囑累此經、十方來諸分身佛、各還本土、乃至多寶佛塔還可如故、等云云藥王品已下乃至涅槃經等地涌菩薩去了、爲迹化衆他方菩薩等重付囑之、拾遺囑是也、疑曰正像二千年之間、地涌千界出現閻浮提、流通此經乎、答曰不然、慈云、法華經並本門以佛滅後爲本、先地涌千界授與之、何正像出現、不弘通此經乎、答曰不宣、重問曰如何、答不宣之、又重問如何、答曰宣之、一切世間諸人如威音王佛來末法、又弟子中粗說之、皆可爲誹謗、嘿止、求云不說、汝墮慳貪、答曰進退維谷、試粗說之、法師品云況滅度後、壽量品云今留在此、分別功德品云惡世末法時、藥王品云後五百歲於閻浮提廣宣流布、涅槃經云譬如七子父母、非不平等、然於病者心則偏重等云云、以己前明鏡推知佛意、佛出世非爲靈山八年諸人、

爲正像末人也、又非爲正像二千年人、爲末法始如予者也、云然於病者、指滅後法華經誹謗者也、今留在此者、指於此好色香味而謂不美者也、地涌千界不出正像者、正法一千年之間、小乘權大乘也、機時共無之、四依大士以小權爲緣、在世下種令脫之、多謗可破熟益故不說之、例如在世前四味機根也、像法中末觀音藥王示現南岳天臺等、出現於世以迹門爲面、以本門爲裏、百界千如一念三千雖盡其義但論理具、事行南無妙法蓮華經五字並本門本尊未廣行之、所詮有圓機無圓時故也、今末法初、以小打大、以權破實、東西共失之、天地顚倒、迹化四依隱不現前、諸天棄其國不守護之、此時地涌菩薩始出現世、但以妙法蓮華經五字令服幼稚、因謗墮惡必因得益是也、我弟子推之地涌千界敎主釋尊初發心弟子也、寂滅道場不來、雙林最後不訪不孝失有之、迹門十四品不來、本門六位立座、但八品之間來還如是、高貴大菩薩約束三佛受持之、末法初可不出歟、當知此四菩薩現折伏時成賢王誡實恐王、行攝受時成聖僧弘持正法、問曰、佛記文如何、答曰後五百歲於閻浮提廣宣流布、天

台大師記云、後五百歲遠沾妙道、妙樂記云、末法之初、冥利不無、傳敎大師云正像稍過已、末法太有近等云云、末法太有近釋、我時非正時云意也、傳敎大師日本記末法始云、語代像終末初、尋地唐東竭西、原人則近濁之生、闡諍之時、經云猶多怨嫉況滅後此言其有以也、此釋闡諍之時云云、今指自界叛逆西海侵逼二難也、此時地涌千界出現本門釋尊爲脇士、一閻浮提第一本尊可立此國、月氏震旦未有此本尊、日本國上宮建立四天王寺、未來時以阿彌陀爲本尊、聖武天皇建立東大寺華嚴經敎主也、未顯法華經實義、傳敎大師粗顯示法華經實義、雖然時未來之故建立東方寶王、不顯本門四菩薩、所詮爲地涌千界選與此故也、此菩薩蒙佛勅近在大地下、正像未出現、末法又不出來、大妄語大士也、三佛未來記亦同泡沫、以此惟之無正像出來大地震大慧星等、此等非金翅鳥修羅龍神等動變、偏四大菩薩可令出現先托歟、天台云見雨猛知龍大、見花盛知池深等云云、妙樂云智人知智、蛇自識蛇等云云、天晴地明、識法華者可得世法歟、不識一念三千者佛起大慈悲妙法五字袋內裏

此珠令懸末代幼稚頸　四大菩薩守護此人、太公周公攝扶文王、四皓侍奉惠帝不異者也、

〔迹門十四品ニハ未ダ說カズ〕。〔八年ノ間、但ダ八品ニ限ル〕。是れ一議論を起したるの源にして勝劣派の起りしもの亦た爰にあり。

第二章　日蓮宗分派の起原

第一節　勝劣派の起原

權實違目鈔に曰く〔法華經に又二經あり、いわゆる迹門と本門となり、〕と。法華經序品より安樂行品に至る十四品を迹門とし、涌出品より普賢品に至る十四品を本門とす。觀心本尊鈔に曰く〔迹門の圓敎は佛因にあらず、〕と。乃ち迹門十四品は佛因にあらざるなり。是を以て日蓮の本懷本門にして迹門にあらず、本勝迹劣の義爰に生ぜり。是れ勝劣派と云ふ者の起りし淵源なり。

觀心本尊鈔に曰く〔一品(壽量品)二半(涌出品後半分別品後半)よりの外は小乘敎、邪見敎、未得道敎、獲藏敎と名づく〕。又た曰く〔迹門の十四品には未だ說かず、(中略)八年の間、只だ八品に限る〕と。是れ八品本隆等の各派を生じたる基なり、

その法華經を判ずるや二經六段となし分て左の如くす。

- 法華經
  - 迹門
    - 序分―序品
    - 正宗分
      - 方便品
      - 人記品
    - 流通分
      - 法師品
      - 安樂行品
  - 本門
    - 序分―涌出品
      - 佛告阿逸多以下の半品
    - 正宗分 壽量品
    - 流通分
      - 分別品
      - 十九行の偈に至るまで
      - 普賢品

乃ち勝劣派分れて五派となれり。曰く興門派、曰く妙滿寺派、曰く本成寺派、曰く八品派、曰く本隆寺派是れなり。之れに反して本迹一致雙用の說をなせるもの是れ稱して一致派と云ふ。一致派また一派を出す。之れを不受不施派と云ふ。不受不施派また一派を出す。之れを不受不施講門派と云ふ。よりて興

門派を一に區別して富士派と云ふ。即ち講門派と聞き誤らざらんが爲めなり。

- 日蓮宗
  - 當一致派
    - 日蓮宗
    - 不受不施派
      - 不受不施派
      - 講門派
  - 當勝劣派
    - 興門派(本門宗)
    - 本成寺派(法華宗)
    - 妙滿寺派(顯本法華宗)
    - 八品派(本門法華宗)
    - 本隆寺派(本妙法華宗)

(一) 興門派と其の派祖

六老僧日興を以て其の祖とす。通しては法華經一部に據ると雖も別しては本門壽量の一品を末法下種正依の經典と定め口唱の題目を正行とし助行には方便品壽量品を讀誦す。本尊には十界の曼荼羅、日蓮の木像、日興の木像

を以て末法應時の佛法僧の三寶と稱し自餘の佛菩薩等の像を安置せず。本山は駿河國富士郡大石寺を始めとし、北山本門寺、西山本門寺、下條妙蓮寺、小泉久遠寺、京都要法寺、伊豆柳瀬實成寺、安房吉濱妙本寺の八箇寺にして末寺は二百六十三寺あり。明治三十一年顯本法華宗と公稱す。日興は甲斐國巨摩郡鰍澤の人なり。寛元四年五月八日を以て生る。初め岩本實相寺に投じ寺主嚴譽に從て台學を學ぶ。嚴譽は即ち智證一派の英なり。建長五年薙髮し康元元年三井寺に行いて盞に讀む。是時に當りて日蓮來りて實相寺の經藏にあり。寺主嚴譽窃かに日蓮を惡みて快とせず。只學頭智海夙に日蓮の學德を慕ひ、請ふて摩訶止觀の講を聽く。智海益〻服す。一日伯耆坊(即ち日興)に日蓮の學德遠く當代に抜んずるを告ぐ。伯耆坊即ち窃かに逃走して途に遇ひ法議を問ひて弟子となる。文應元年日興を改め白蓮と字す。臨池の技に巧みなり。安國論の草案實に日興の手になる。日蓮の佐渡に竄せらるゝや昭師と共に潛んで玉澤にあり。向持頂三弟と共に更〻佐州に定省す。

駿河國富士郡上野の邑主某、始め實相寺の檀越たりしが後ち深く日蓮に歸

依す。日蓮の說く所を錄して日興之を上野邑主に與ふ。即ち日興記これなり。弘安五年日蓮の池上に滅に入りしより六老輪次塔を守り、同六年春遂に喪の修了を告げぬ。是に於て五老退散して各布敎に從ふ。日興また上野に廬して居す。同八年、日向身延に行いて直す。檀越波木井實長日向に向て云ふ、「龍塔更に守るは祖命によると雖も法の爲め山の爲め甚だ便を欠く。何となれば諸山は各々其主在りて山門日に盛なり。身延獨り然らず。常に旅泊の想をなして來る。淨界年を逐ふて衰ふ。高祖棲神の靈塲、一家の祖山、もし他日荒凉に就かば何を以て宗祖に答へん。師熟之れを謀り給ふべし」と。日向乃ち昭朗二師に告ぐ。また奈何ともする無し。日興獨り肯ぜず。曰く「輪次人無くんば之を議するも可なり。我儕六人齊しく遺命を承け未だ數年ならず。聖命に乖くこと何ぞ速かなる。法運の通塞、俗子の關り知る所に非る也」と。嗚呼、能化の人此の如くならざるべからず、檀越の鬚を拂ひて齷齪其鼻息を窺ふ所の賣僧之を讀んで愧死して可也。俗子實長遂に懌ばず。日興怫然衣を拂て去る。上野と波木井とは親戚たり。日興、上野に居るを快とせず。直ちに安房國平群郡保田

に往き一草庵を搆へ杜門專ら世緣を絕ち唱題誦經を事とす。今の中谷妙本寺これなり。永仁五年秋實長卒す。上野公、日興の道儀を仰ぎ忘るゝ能はず一精舍を建て日興を待つ。固辭して再三。邑主懇請遂に之に應ず。寺傍に一大石あり。故に號して大石寺と云ふ。後ち北山に居り本門寺と名づく。正慶元年二月七日壽八十八を以て寂す。

思ふに日興の世にある、一派をなすの威あらざりしなり。只だ憍檀越波木井實長と合はざりしのみ。殿堂伽藍其壯大を極むと雖も尤より其宗の盛大なるの徵にあらざるなり。法運の盛衰、誠に俗子の識る處にあらず。況んや延山は日蓮の退隱の地なり。云ふをべくんば涅槃部の時なり、流通分の地なり。日蓮の「未來際マデモ心ハ身延山ニ可住候」と云ひしもの、豈にひとりその英靈事の身延にのみ住するの意ならんや。知るべし日蓮の英靈は廣く三千大千世界に包滿することを。かの一派となりしが如きは後人の所業のみ噫。

(二) 本成寺派と其の派祖

日蓮の法孫日印を以て其の派祖となす。法華經中前十四品を迹とし劣となし、後十四品を本とし後となす。而して本門中壽量の一品と涌出分別二品の二半を極勝とす。然れども本門開會の意に住して一部八卷廿八品を讀誦し或は方便壽量等を讀誦するを助行とし本門壽量の肝要たる南無妙法蓮華經を唱ふるを正行とす。本山は越後國蒲原郡本成寺にして現今一百八十箇寺の門末を有す。明治三十一年公稱して法華宗と云ふ。

日印は越後國蒲原郡三條の人にして姓を朝倉と云ふ。文永元年に生る。年甫めて八歲、天台宗石瀨山靑龍寺智觀に投ず。研鑽得る所あり、遂に諸宗の奧義を伺はんと欲し先つ鎌倉に出て、京都に行き南都北嶺に學び、復び鎌倉に寄り比企ヶ谷に遊ぶ。會〻日朗比企ヶ谷に在て摩訶止觀を講ず。日印聞いて大に感じ就て大に質す。遂に贄を執て師事す。日朗乃ち摩訶止觀第一卷の講を聞いて發悟したるを以て名を摩訶日印となす。時に永仁二年四月八日也。文應二年日朗の寂するや喪事を修め、了て各越に歸し本勝寺と號す。文享元年春本勝寺を日靜に付し越後に歸る。之より敎化大に舉る。適〻庭上に靑蓮華生ず見者異となす。因て寺を造り靑蓮寺と稱し後本成寺と改む。今の越後國蒲原

郡本成寺是れ也。嘉暦三年微疾あり、日を追ふて重し。遠く日静を召し具に後事を囑す。十二月二十日泊然として化す。壽六十五。塔を金津妙蓮寺に築く。日静克く其縱を守り後ち鎌倉に還る。十餘年にして日陣を得たり。日静は本成本勝の二寺の兼主たりしが、本成寺を以て弟子日陣に囑す。日陣は即ち本勝迹劣の主唱者なり。迹門未得道を祖述し遂に一派をなし日印を以て勝劣派の派祖となす。

(三) 妙滿寺派と其の派祖

日什を派祖とす。法華一部を經典とし本勝迹劣從淺至深と云ひ、本門中勝劣淺深を立てゝ壽量品を深勝とし題目を成佛下種の最深秘法と稱す。本山は京都妙滿寺にして末寺五百八十九あり。明治三十一年顯本法華宗と公稱す。日什は陸奥國會津の人なり。初め妻を畜ひ子を有す。一時翫然として悟る所あり妻子を捨てゝ敵山に登り慈邊に師事し玄妙と改む。教觀を受け克く顯密に通ず。既にして羽黒山に職とするや華名某講を請ふ。玄妙乃ち三大部を講ず。雲集殆んど千、雷名奥羽に轟く。或時思へらく、法華に本迹二門あり、付屬

に本化迹化、あり、時に像末の異あり、今や時運末法に會す、是れ本化出現の秋也。而して未だ其人を見ずと。時に下總眞間の人左京某なるものあり、偶奥羽に遊び途に玄妙の名を聞き尋ねて來る。左京の齋す所の別頭開目鈔、如說修行鈔を讀み、多年の意霧一時に散然たり。左京問ふて云ふ、我宗今兩派となる。師は一致たるか將た勝劣たるか玄妙曰く本迹は權實なり、權實あに勝劣に非ずや。左京之を貶け相別る。玄京富士に趣き本國に歸らんとし途に中山を過ぎ左京を訪ひ、中山に日尊に遇はんことを求む。左京拒む。懇請遂に行いて問ふ。日尊見て學未だ熟せずとなす。玄妙住して修む。時に眞間の日宗德望世を蓋ふ。玄妙左京を介して屢往いて伺ふ。日宗勝劣の惑を砕して容れず遂に議論に及び、豁然として悟了す。乃ち誓文を造りて謝を陳ぶ。日尊聞いて大に喜ぶ。玄妙遂に名を改めて日什となす。

時に正に南北の朝に際し戰雲常に暗憺たり。日什以て國の爲め法の爲め默止すべき時に非ずとなし永德元年帝都に出てゝ自ら治國策を製し日蓮の安國論と併せ以て北帝に献ず。帝深感休息の地を京都に賜ひ二位僧都に任

ず。營造力を振ふ。今の妙塔山妙滿寺是れ也。後ち遠江國玄妙寺、同吉美妙立寺、武藏國品川本光寺、相摸國鎌倉本興寺を造る。至德三年二月廿八日壽七十九を以て寂す。沒後門僧日什の本懷を知らず今に勝劣を唱へ、日什を推して妙滿寺派の祖となす。

(四)八品派と其の派祖

日隆を派祖とす。法華經本門中涌出品より囑累品に至る八品を以て正依の經典と定め、但々信口唱を成佛の正因となす。本山は京都本能寺、妙蓮寺、尾崎本興寺、駿河國岡宮光長寺、上總國鷲巢鷲山寺にして末寺三百三十三あり。明治三十一年本門法華宗と公稱す。

日隆は越中の人也。父を桃井尙儀と云ふ。尙儀の二弟共に塵網を出て京都妙顯寺龍華日霽に投ず。兄を日存と云ひ、弟を日純と云ふ。即ち皆な日隆叔父なり日霽常に日存日純を敎え先づ本迹勝劣の敎を授け未だ秘理別付の日に及ばずして逝きぬ。故に存純唯だ勝劣有るを知て一致の奥を窺はず、動もすれば法兄日明を詰る。日明之を哀しみ屢〻砕して不可となす。日存別に盧を搆

へ益〻勝劣を唱ふ數年なり。一旦豁然として會通し兄弟相謂て云ふ、先師勝劣の說是れ中止一城の方便のみなりと。兩弟手を携へて走り法兄に謝す。日明大に喜び云ふ。今法王の大寶自然にして至ると。是に於て兩師志を改め行業積年、造營力を振ふ。殿堂成り號して楊柳山妙蓮寺と稱し日像を崇めて開山と爲す。

日隆字は深圓精進院と號す。叔父日存日純の出家を羨み、遂に妙顯寺日霽に仕ふ。不幸にして蚤く日霽を失ひ二叔勝劣を唱ふるを見る。日隆隨て唱ふ。後ち二叔悔悟して之を止むるや師獨り移らず執弊愈固し終に別盧を搆ふ。今の本能寺是れ也。又攝の尼ヶ崎を築き本興寺と稱し弘通大に勉む。時に本果日朝あり甲の立正寺駿の光長寺の兩主なり。日隆と相會し針芥相投ず。一時「西隆東朝」と云ふ。日明聞いて大に愕き召して之を糾彈す。屈せず、遂に議論に及び累日眠らず。工夫千般、一旦醒悟する所あり疾走して罪を謝す。日朝は岡宮に隱れ固執益〻甚し結黨柄を取る。岡宮今に盛なり。日隆は寛正五年二月廿五日壽八十一を以て化を他界に遷す。後人日隆を以て八品の祖となす。

(五)本隆寺派と其の派祖

日眞を派祖とす。本勝迹劣を唱ふ。元と本成寺派に隷屬せしが明治九年に一派獨立の免許を得たり。本山は京都本隆寺にして末寺七十二箇寺あり。明治三十一年本妙法華宗と公稱す。

日眞の父は中山中納言親通、母は山名義時の女にして文安元年三月廿九日但馬に生る。七歳市めて妙境寺の日全に投じ十二歳にして剃髪す。同年園城寺に入り十八歳叡山は登て顯密を學ぶ。廿三歳京都妙顯寺に入り日具に就て宗義を研究し大に悟る所あり。爾後化を南越に布く、其途次若狹國小濱を過ぎ妙興寺の日因を論伏し一寺を建立して惠光山本境寺と號す。之を弘宗立義の掬めとなす。越前熾然化を施し武生の本興寺日源、平等會寺日唱等會下に屈す。時に門下に歸伏するもの三十六箇寺、信徒壹万餘人なり。後攝津に一宇を開き久成寺と號す。長享二年秋京都に歸り一宇を六角西洞院に搆へ本隆寺と號し法華宗勝劣派と公稱す。日眞學に長し天臺に深し、三大部及ひ天親の法華論の科文註釋を撰述す。名聲高く天皇に達し文龜天皇其著書に

感じ法華宗像門正統及び大和尚の宸翰を下し惠光無量山本妙興隆寺の銅印を附す。享祿元年三月廿九日溘然として寂す。壽八十五。

第二節　不受不施派の起原

不受不施派は一致雙用なり。十法界鈔に曰く「記の九に曰く本門顯レ竟レバ則チ二種俱ニ實ナリ。此釋の意は本門未だ顯れざる以前は本門に對すれば猶ほ迹門を以て虛となす。若し本門顯れ竟れば迹門の佛因、則ち本門の佛果なるが故に天月水月本有の法となりて本迹俱に三世常住と顯るゝなり」と。只だ下不受不施の要は謗法の施物を受けず、謗法の法施をなさゝるにあり。法華經を信ずる者則ち是れ謗法也。予輩は其信念の堅く其節を持するの高きに敬服せずんばあらざる也。此派の祖は即ち安國院日奥其人なり。日奥は永祿八年京都に生る。甫めて十歳、妙覺寺日典に師事し十八歳剃髪す。永祿元年妙覺寺を嗣す。時に豐臣秀吉大佛妙法院に千僧供養を營み各宗一百名の僧を請待す。日蓮宗の諸師之に應ず。日奥獨り不受謗施の義を唱へて却く。九月廿五日妙覺寺を退き丹波國小泉に隱る。慶長四年德川家康、日奥を大坂に召

し千僧會に出席を勸む。師堅く執て動ず、五年六月遂に對馬に謫せらる謫居中粒食給せず厥供菓蔬を採て纔に身命を支ひ、具に艱苦を嘗むると凡そ十三年。而して志操確乎遂に變ぜず。慶長十七年赦に値て歸京し寛永七年三月十日妙覺寺に寂す。壽六十六。寛永七年武藏國池上本門寺に日樹あり再び此義を主張し寛文五年平賀の日述等恩田派と稱し日明日禪等悲田派と稱し又共に不受不施を唱ふ。明治九年四月釋日正の請に依り之を公許す。本山は備前國妙覺寺のみにして末寺なし、但だ教會所十餘箇所あるのみ。

不受不施講門派の異る所は寺院を建立せず教會組織なるにあり。明治十五年別派獨立の允許を得たるにて其の祖は即ち安國院日講なり。日講は寛永三年九月山城國に生る始めて十歳妙覺寺に入て薙髮し宗義を學ぶ。二十歳關東に遊學し螢雪積年學成て北總野呂檀林の請により天台の三大部を講ず。寛文六年四月日講、守正護國章を選述して幕府に贈り、不受不施の義に據て寺領名義の事を論じ遂に罪を得、日向國佐土原に流さる。爰に謫居する三十三年遂に元祿十一年三月十日を以て謫地に化す。壽七十三。著書錄內啓蒙

等數部あり。

第三章　日蓮宗の法脈相承

本宗正依の經典は妙法蓮華經八卷、無量義經、觀普賢經各一卷、及び註法華經十卷、御義口傳二卷、遺文錄三拾卷等なり。

妙法蓮華經は如來滅後一千三百五十餘年を經て支那東晉の義熙二年(即ち西暦四百〇六年)印度の沙門鳩摩羅什之を譯す。此經一部八卷二十八品あり。

無量義經は北齊の建元三年印度の沙門曇摩伽陀耶舍の譯する所にして此經三品あり。

觀普賢經は劉宋の元嘉年中、印度の沙門曇摩密多の譯也。註法華經は日蓮自ら經論疏釋の要文を拔萃して其所持の三部の妙典に註記したるなり。

御義口傳は日蓮自撰の註法華經に就き上足門弟の爲めに三部十卷の要文を採摭して咸く妙法蓮華經の五字に歸結し觀心證道の實義を口授し弟子日興をして筆記せしものにて一に日興記と云ふ。

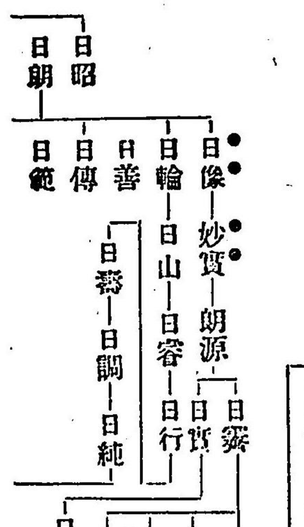
遺文錄は宗祖の滅後六老僧の偏く緇素に告げて蒐集したる遺文にして其

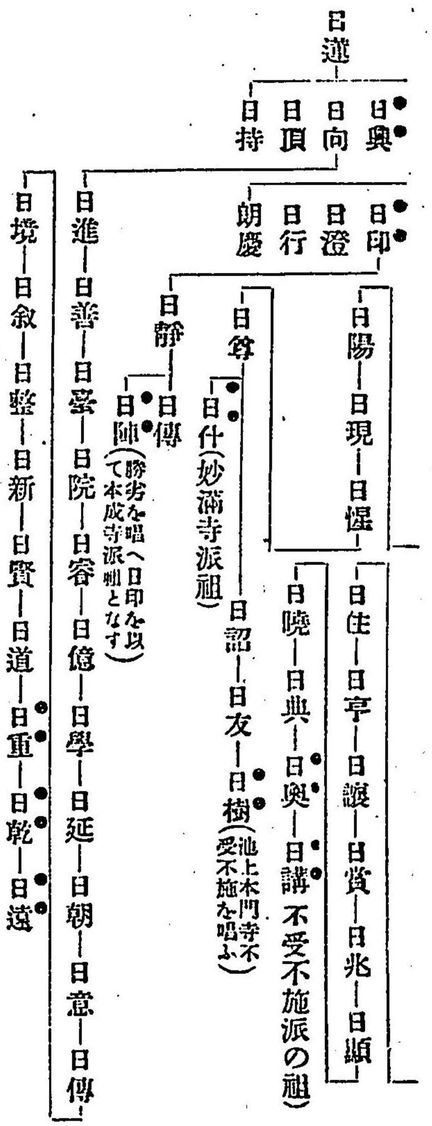
の蒐集の際目錄に入るべきものを錄內と云ひ百四十餘篇あり、其目錄に入らずして漸次蒐集したるものを錄外と云ひ、二百五十餘篇あり。近年小川泰堂之を年次を逐て編纂し高祖遺文集と稱す。今年に至り池上林昌寺高主加藤文雅師三年の星霜を費して之れを活版に附し袖携に便にし其の弘布に資す。名けて日蓮聖人御遺文鈔と云ふ。

妙法蓮華經宗は久遠の本師釋迦牟尼佛の所立なり故に所依の經典に據て法華宗と號し、能化の人に依て日蓮宗と稱す。法華宗の號は日蓮の自稱にして且つ法華宗號の後醍醐天皇の綸旨現存せり。故に維新前は天台法華宗に簡別して日蓮法華宗と稱せり。今單に日蓮宗と云ふは日蓮法華宗の略稱なり。

日蓮の朗峯山に涅槃を現じてより六老僧の英あつてよく其の宣傳に勉め日持は海外布教を企つ。後醍醐天皇の元亨年間法孫日像蝎を奉じて京都に上り遂に九重の雲をして妙香に薰ぜしめ、光明天皇の貞和年中に至て漸く盛に、後花園天皇の嘉吉寛正の頃に至て方に其の盛を極む。後奈良天皇の天

文五年天台宗と宗論あり、彼の徒兵を起して火を放ち侵擊して京都の本宗諸本山を燒く。世に天文法亂と云ふ、即ち是れなり。後陽成天皇の文祿慶長年間に京都妙覺寺の日奥不受不施を唱へ、後水尾天皇の寛永年中武州池上本門寺の日樹再び之れを主張して宗内大に動き本宗の大山巨刹數十箇寺之が爲めに廢滅に歸す。以上天文法亂、兩度の不受不施とを以て本宗の三大厄と云ふものなり。時に開宗を去る三百餘年なり。此の時に當て三大師は出てぬ。之れを日重、日乾、日遠となし呼んで重乾遠の三師となす。乞ふその法脈相承の狀態を示さん。





日重は一如院と號す、山城國の人なり。六歲にして本國寺日道に投じて得度す後ち本滿寺に住す。時に妙覺寺日奥不受不施を唱へ宗徒大に迷ふ。日重乃ち日奥を論破し炳焉惑ふもの無きに至れり。蓋し此の時開宗を去る三百年法論喧囂統一する所無く、日重大に憂ひ檀林を創立し天台學を興して宗乘を扶け著書數十卷を致す。學者靡然として風に伏す。元和九年潤八月六日寂七十五を以て寂す。

日乾は越前の人なり寂照院と號す。十二歳にして本滿寺日重に師事し機に六年當台二家の學に通曉す。遂に諸宗の雄刹に遊び廣く經論を究む。歸て求法檀林の講主となれり。慶長六年甲州身延久遠寺に瑞世し同七年後陽成天皇の勅により紫宸殿に宗義を講ず。仍て宗門綱格一卷を撰て献す。元和六年紀州侯の母堂養珠院の請に依り駿州貞松山蓮永寺を中興す。寛永四年鷹峰檀林を創設して盛に宗徒を教育す。同五年武州池上本門寺の日樹不受不施論を唱へ一宗また亂る。日乾その弟子日遠と共に公廷に於て日樹と法義を格し遂に說破して亂定まる。寛永十二年十月廿七日壽七十六を以て化す。日遠、心性院と云ふ、山城國の人也、生れて六歳日重に投じ幾ならずして法華を通徹し十六歳能く法華を講ず。尋て南都北嶺に遊學し入宗の奥義を究む。慶長四年下總國飯高檀林の請に應じ講師となる。同九年身延久遠寺に住職す。會、常樂寺日經淨土宗と事あり、師乃ち幕府に請ひ公廷に於て法義の論決を求む。時に國法諸宗の問答を禁ず。大將軍家康は淨土宗の迷信者なり。大に怒て日遠を磔刑に處す。日遠神色自若從容として刑に臨む。家康感じて赦す。

寛永年間師日乾と力を協せ不受不施の法亂を定め宗規を釐正す。日遠性仁慈、常に衣食を割て凍餒を救ふ。淸素刻苦を持する嚴正、著書殆んど百卷。寛永十九年三月五日壽七十一を以て遷化す。以上重乾遠の三師を呼び本宗中興の三師となす。

次て起れる明師あり。之を深草元政其の人となす。元政は字にして日政と云ふ。元和九年二月京都に生る。十三歳にして彦根侯井伊直孝に仕へ勤仕の暇、讀書よく勉む。年二十六奮然として妙顯寺日豐に從ひ薙髮す。明暦元年城南深草に一寺を創立し瑞住寺と云ふ。其の行業や諸本山の通規に依らず攝受門を開て別に淸規を立て專ら律儀を修め自ら一家を爲す。日政資性孝順父母を瑞光寺の側に養ふ、衆皆な服す。高僧門下より輩出す、彼の惠明和尙は實に其弟子にして六牙日潮は其法孫なり。元政は寛文八年二月十八日年四十六を以て寂す。惜むべし。弟子遺命に從ひ塔を建てず唯竹三竿を栽へて墓を標す。著書若干、草山集の如きは千古不磨の文字なり。讀まざるべからず。爾來諸檀林は軌則に墨守して變通を知らず、學者天臺學に流れて更に宗學ある

を忘れ大に立宗の厚意を失す。是に於て東都に一妙院日導あり、加州に優陀那日輝あり、大に之を慨して宗學を喚起す。

日導姓は井上、一妙院と號す。肥後國熊本の人也。父篤く法華を信ず。十歲本妙寺の東光院に投じ剃染榮雅と名づく。後東都妙福寺日禪に遇ひ、名を智溪と贈らる。牛込惠光寺にあつて講演に盡し天明三年退いて著述に心を從ふ。五年春「祖書綱要」成る。寛政元年に寂す。

思ふに宗學は一時頽癈に歸し重乾遠の三師出ていしこれが復興あり。元政出ていしその發展の運に向ひ、後ち二師相次て發展また發展の道に出でしと云ふべし。此二師とは誰ぞ、曰く本妙日臨律師、曰く優陀那日輝和尚是れ也。

日臨は東京青山の人、幼にして父を喪ひ母に事えて孝順、蚤に出塵の志有り、下谷宗延寺日實に從て得度す。師や元政の風を慕ひ遂に遠縱を尋ねて深草に至り居す。後ち甲州波木井に移り一小庵を結んで世緣を絕つ。道俗仰慕す。偶〻水戸談林の請に趣いて行き病を得て遂に寂す。實に文政五年九月十七日

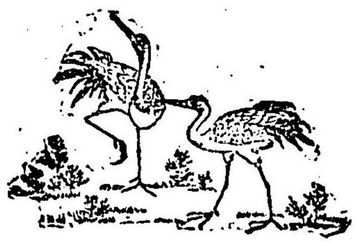
也。春秋僅に三十六。師や戒行を重んじ著す所「佛海微瀾」「敎觀醫林」「妙經述讚」等あり。皆本宗の微旨を發する多し。日輝の學風遂に全く爰に起る。

野口駒三は日輝和尚の幼名なり。加賀藩に生る。剃髮して覺善と稱し堯山と改む。又た優陀那と稱す。初め慈雲寺日行に從ひ、日行の死するや、妙立寺日雄に從ふ。深草本妙日臨學行並び高しと聞き往いて學び大に悟る所あり。後ち室を加賀立像寺の後園に築き沈に潛究遂に前世諸師の軌範を脫し日蓮の深旨を發揮す。著書百餘卷、妙論卓說誠に謹讀すべし。稱して中興の祖となす。

是より高僧頓に顯れ宗風大に擧る。日輝に三高足あり。鑑薩修と云ふ即ち吉川日鑑、新居日薩、三村日修是れ也。皆な本宗の革新に功有あり。明治九年新居日薩の管長となるや官衙に强請して遂に一致派の名稱を廢し單に日蓮宗と公稱せり。尋て勝劣各派も亦官の許可を稟け勝劣の派名を去り日蓮宗某派と公稱し各派に管長を設置す。日鑑人と爲り豪放洒落、人衆服す。日薩性や豪毅嚴肅、足音を聞いて人其襟を正す。日修資性溫厚仁慈、猛夫も聲を聞いて垂る。日薩の弟子を敎うるや峻嚴、放逸の命に接せざるもの殆んと無し。然れ

ども其門英俊を出し共に皆な現日蓮宗の雄鎮也、小林日薫、守本文靜、脇田堯惇、田中智學、清水梁山、加藤文雅の如き是れなり。

日蓮聖人傳了



◎正誤（○誤●正）

三十二頁の八行『路に武州程ヶ谷に宿り。』は『路に宿り』に訂正
三十四頁の十二行『守護國家論及び念佛（五篇）』は『守護國家論（五篇）』に訂正
三十五頁の十行『宗敎』は『宗論』に訂正
三十六頁の十行『法華題目』は『法華題目鈔』に訂正
三十八頁の八行『（人阿佛劣と稱す）』は『阿佛防と稱す）』に訂正
三十九頁の七行『佛法血脉』は『佛法血脈鈔』に訂正
三十九頁の十行『當體義』は『當體義鈔』に訂正
四十頁の十二行『大士顯立正意見』は『立正觀鈔』に訂正
四十五頁の三行『六老と稱す』は『六老僧と稱す』に訂正
五十八頁の七行『遙か程谷』は『遙かなる』に訂正
五十八頁の二行『出家剃髮の年』は『二十一歲の年』に訂正
八十七頁の五行『摧邪輪』は『破邪論』に訂正
百七十三頁の『第一章』を『第七章』に訂正
百七十八頁の『第二節』を『第三節』に訂正
百八十四頁の『第三節』を『第四節』に訂正

猶ほ正誤すべき處あれども編輯部、頗る繁忙を極め其の意を得ず。再版の時に於て之れを正さん讀者之れを諒せよ

（校正者識）

1410/38

明治三十八年四月七日印刷
明治三十八年四月十九日發行

教界偉人叢書第七編
日蓮聖人傳奥附
上製價六十錢
並製價四十五錢

著作者　蜷川龍夫
著作者　菊池茂
發行者　清水金右衛門　東京市本郷四丁目五番地
印刷者　多田三彌　東京市麹町區内幸町五番地

發兌元　東京市本郷四丁目五番地　文明堂
同　熊本市新町　長崎次郎
賣捌所　川瀬代助　吉岡平助　菊竹書店　福音社

版權所有

文明堂出版圖書大賣捌店

東京市	東京堂	越後水原町	萬松堂
同	上田屋	周防岩國町	白銀伊兵衛
同	森江書店	熊本新町	長崎次郎
同	林平次郎	金澤市元町	宇都宮
同	前川文榮閣	神戸市元町	日東館
同	警醒社	豐後大分町	甲斐治平
同	勉强堂	越後長岡町	覺張治平
同	松村書店	弘前市	今泉道次郎
同	目黑書店	越後直江津	柿村書店
名古屋本町	川瀨代助	越後新潟市	萬松堂支店
京都西六條	興敎書院	越中富山市	學海堂
大坂備後町	吉岡平助	信州松本町	高美書店
同	福音社	山形市七日町	牧野書店
同 心齋橋	菊竹書店	京都三條寺町	聖書房
欠留米市		盛岡市肴町	佐々木仙助
北海道札幌	富貴堂	肥前唐津町	牧川書店
福岡博多	積善館		
信州長野市	西澤喜太郎		

福井市	中村六三郎	佐桂枝中町	中村六三郎
山形縣鶴岡十日町	日向書店	新潟	酒井書店
長岡表一ノ町	酒井書店	静岡市吳服町	吉見書店
秋田縣秋田市	成見清兵衛	鹿兒島市仲町	久永金藏
廣島市大手町	東西堂	島根縣松江市	文會堂
新潟市古町通	北光社	横濱市吉田町	有憐堂
京都木屋町	貝葉書院	京都東六條	法藏館
甲府市柳町	柳正堂	岡山市大寺町	武內書店
名古屋門前町	三浦兼輔		

其他全國各書店

38
44

78
44

020060−000−5

78−44

日蓮聖人伝

蜷川 龍夫
菊地 茂／著

M38. 4
ABH−0260